

聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅳ

第1回 恐怖の次に起こることとは？

1 恐怖の次にあるもの

「聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅲ」では、恐怖がいかに人間を支配するかを見てきました。

死への恐れ、不安、欠乏、他者の評価に対する恐れなど、恐怖は人間の心に入り込み、その判断と行動を拘束する力として働きます。

恐怖は単に人間を苦しめるだけで終わるものなのでしょうか。それとも、さらに別の状態へと人間を誘導する働きを持っているのでしょうか。

聖書全体の流れを踏まえて考えてみると、恐怖は単独で終わるものではなく、次の段階へと人間を誘導する働きを持っています。その次の段階とは「思考の停止」です。

恐怖の特徴は、人間を動揺させ、判断を不安定にする点にあります。問題はそれが単なる感情の揺れにとどまらないことです。人は強い不安や恐怖を感じると、冷静に考える力を失いやすくなるのです。

聖書もまた、「神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです」（テモテへの第二の手紙1章7節・新共同訳）と語っています。

恐怖は人間から冷静さを奪い、判断を不安定にしますが、神はむしろ人間を真理に基づいて判断できる状態へ導こうとされるのです。

2 恐怖は思考を奪うもの

強い恐怖に直面すると、正常な判断ができなくなります。これは日常的な経験からも理解できることです。驚いたとき、人は瞬間的に思考が止まり、本能的な反応に従うようになります。

この状態が一時的であれば問題はありませんが、恐怖が継続してもたらされると、次第に「考えることそのもの」を避けるようになります。

なぜなら、考えることは現実と向き合うことであり、それがさらに不安や恐怖を呼び起こすからです。

その結果、人は自ら判断することをやめ、外から与えられた情報や指示に依存するようになるのです。このとき、表面的には自由に見えても、実際には非常に

操作されやすい状態に置かれています。

ローマ人への手紙 12 章 2 節の「この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」というみ言は、この問題の本質を示しています。

思考を放棄することは、この世に流されることと直結しているのです。

3 従順と無思考は異なる

恐怖が支配する状態において特徴的なのは、人が自ら考えることをやめ、従うことを優先するようになる点です。

しかしここで注意しなければならないのは、聖書が教える従順と、恐怖によって生じる従順とは本質的に異なるということです。

聖書における従順は、神を知り、理解し、信頼したうえで、自ら選び取る主体的な従順です。

イエスもまた、「わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである」（ヨハネ福音書 15 章 15 節）と語られました。

ここで示されているのは、何も理解しないまま従わせる関係ではなく、真理を知らせたうえで、自らの意志で従う関係です。

それに対して、恐怖から生じる従順は、思考を停止した結果としての受動的な服従です。

この二つは外面的には似ていても、その内実は全く異なります。前者は自由から生まれ、後者は束縛から生まれるものです。

4 思考停止という危機

人間に与えられている最も重要な能力の一つは、自ら考え、判断する力です。この力によって人は真理と偽りを見分け、正しい選択を行うことができます。

しかし恐怖が支配する環境の中では、この能力が次第に弱められていきます。人は考えることをやめ、流れに従うことを選ぶようになるのです。

そしてその状態が続くとき、考えないことが常態化し、それが一つの習慣として固定されていきます。

ここにおいて初めて、悪の支配は安定したものとなります。なぜなら、人が自ら考えなくなったとき、その人はもはや外からの支配に対して抵抗できなくなる

からです。

恐怖は入口にすぎません。その真の目的は、人間の内面において思考の機能を停止させることにあるのです。

5 思考停止の次に起こるのは習慣化

思考が停止した状態は、一時的なものでは終わりません。それはやがて繰り返される行動となり、習慣となり、人格の一部として定着していきます。

この段階に入ると、人は自分が支配されていることにさえ気づかなくなりま
す。なぜなら、その状態に慣れ、違和感を覚えなくなっていくからです。

ここから先は、恐怖の問題ではなく習慣の問題となります。すなわち、人間は恐怖によって動かされる段階から、何も考えずに同じ反応を繰り返す段階へと移行していきます。

悪の支配を見抜くためには、この構造を理解することが不可欠です。

6 恐怖の先にあるものは思考停止とその習慣化

恐怖が人間を支配する力は強大なものですが、それ自体が最終目的ではありません。恐怖の本当の役割は、人間から思考する力を奪い、考えない状態へと誘導することにあります。

そしてこの状態こそが、次の段階である惰性と習慣による支配の出発点となります。

今回は、この思考停止がどのようにして惰性と習慣を形成し、人間を無意識のうちに支配していくのかを考察していきます。

第2回 惰性の習慣

1 思考停止の次に起こること

前回、恐怖が人間から思考する力を奪い、考えない状態を生み出すことを見てきました。この状態は一時的なものでは終わりません。

むしろ問題は、その状態が繰り返されることによって、次第に固定化されていく点にあります。

人は一度考えることをやめると、その状態に慣れていきます。そして同じような状況に直面したとき、再び考えることを避け、同じ反応を繰り返すようになりやすいのです。この繰り返しこそが惰性の習慣を形成していきます。

したがって、思考停止は一時的な現象ではなく、やがて人間の生き方そのものを形づくる要素となります。

2 習慣とは何か

ここで改めて、習慣の本質を理解することが重要です。習慣とは、繰り返される行動や思考が無意識のレベルにまで定着した状態を指します。

最初は意識的に行っていた行動であっても、それが繰り返されることで、やがて考えなくても自然に行われるようになります。

この意味において、習慣は単なる行動の反復ではなく、内面の方向が固定化されていく過程でもあります。

この過程で、人は自分が選択しているという感覚を次第に失っていきます。

つまり習慣とは、選択の結果でありながら、最終的には主体的な選択の意識が失われた状態へと変化したものです。この点において、習慣は人間の自由と密接に関わっています。

3 惰性とは何か

この習慣がさらに進むと、惰性と呼ばれる状態になります。惰性とは、単に行動を繰り返すことではなく、選択そのものを停止した状態です。

人は惰性の中で生きるとき、なぜそれをしているのかを問わなくなります。

ただ今までそうしてきたからという理由で、同じ行動や思考を続けます。このとき、人はもはや主体的な自らの意志で生きているとは言えなくなります。

ここで重要なのは、惰性が単なる怠けではないという点です。惰性とは、思考停止が習慣として固定化された状態であり、構造的に形成されるものです。

4 意志の問題ではない

この問題を考えるうえで注意しなければならないのは、これを意志の弱さとして理解してしまうことです。しかし、惰性の問題は個人の意志の強さだけで説明できるものではありません。

なぜなら、人間は環境や繰り返しの影響を強く受ける存在だからです。同じ思考や行動が繰り返される環境の中にいるとき、それは自然に定着していくのです。

この意味において、惰性は選ばれているものであると同時に、形づくられているものでもあります。

人は自分の意志だけで完全に自由に行動しているのではなく、過去の選択と環境の影響の中で生きているということです。

5 支配の完成形としての習慣

このようにして形成された習慣は、やがて人間の思考と行動を無意識のうちに支配するようになります。

聖書においても、人間が繰り返し罪に従うことによって、次第に感覚そのものが鈍くなっていく姿が描かれています。

彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ、自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆる不潔な行いをし、放縦に身をゆだねている。（エペソ4章18～19節）

ここで言われている「無感覚になって」とは、善悪に対する感覚そのものが鈍くなることを意味しています。

すなわち、習慣化された行動は、単に行動を固定化するだけでなく、人間の感覚や判断基準そのものを変化させていくのです。ここにおいて悪の支配は一つの完成形に達します。

恐怖の段階では、人はまだ不安を感じながらも意識的に反応していました。しかし習慣の段階では、その反応が無意識のものとなり、自動的に繰り返されるようになります。

この状態において最も危険なのは、自分がどのような状態にあるのか自分で気づかないという点です。なぜなら、その状態が自分の中で常態化しているからです。

6 聖書が示す原理

聖書は、このような状態について明確に語っています。

あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。（ロマ書6章16節）

このように、人は繰り返し従うものに支配される存在です。

また「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」（ガラテヤ6章7節）という言葉も、同じ原理を示しています。

これは単なる因果の法則ではなく、人間の行動の積み重ねが、その人の霊的状态を形づくるという原理を示しています。

どのような思考や行動を繰り返すかによって、その人の生き方が決定されるのです。

これらの聖句は、習慣が単なる生活上の問題ではなく、霊的な支配の問題であることを示しています。

7 自分で考えない状態の危険性

最終的に、この惰性の習慣がもたらすのは、自分の頭で考えない状態です。人は自ら判断することをやめ、既にある枠組みの中で反応するだけの存在となります。

この状態において、人は外からの影響に対して極めて無防備になります。なぜなら、何が正しいかを自分で判断する基準を持たないからです。

イエスもまた、このような状態について、「あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。」（マタイ13章15節）と語られました。

ここで言われているのは、単なる知識不足ではありません。自ら考えようとせず、真理に対する応答を放棄し続けることによって、真理を受け取る力そのものが弱まっている状態です。

すなわち、人は考えることをやめ続けると、やがて真理に対する感覚そのものを失っていくのです。

ここにおいて、思考停止は単なる個人的な問題ではなく、人間の自由そのものに関わる問題となります。

8 まとめ

以上のことから明らかなように、習慣は単なる繰り返しの行動ではありません。それは思考と選択を無意識化し、人間の生き方を内側から支配する力です。

恐怖が入口であるとするならば、習慣はその支配を固定化する仕組みであると言えます。

今回は、このような習慣がどのようにして形成されるのか、さらに具体的に「思考を奪う方法」という観点から考察していきます。

第3回 悪の戦略①思考を奪う方法

1 習慣の背後にあるもの

前回は、思考停止が繰り返されることによって惰性の習慣が形成され、人間の思考と行動が無意識のうちに支配されることを見てきました。

ここで重要なのは、この習慣が自然発生的に形成されるのではないという点です。そこには、人間から思考を奪う方向へと誘導しようとする働きが存在しているのです。

すなわち、惰性の習慣の背後には、それを生み出す構造があるということです。

今回はその構造を明らかにし、悪がどのようにして人間の思考を奪っていくのかを考察します。

2 出発点は偽り

思考を奪う働きの出発点は偽りにあり、「彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ」（ヨハネ福音書 8章 44節）というみ言は、この点を明確に示しています。

ここで示されているのは、悪の本質が強制的な力ではなく偽りにあるということです。真理を覆い隠し、人間に誤った認識を与えることによって、その思考を歪めていきます。

この偽りは単純な嘘として現れるとは限りません。むしろ多くの場合、それは事実の一部を強調し、別の部分を無視するという形で現れます。

その結果、人は全体を誤って理解し、誤った判断へと誘導されていきます。創世記 3章における蛇の誘惑も、この特徴をよく示しています。

蛇は、「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる」（創世記 3章 5節）と語りました。

実際に、人間は善悪を知るようになりましたが、その結果として生じる神との断絶や死、恐怖については語っていませんでした。

つまり蛇は、完全な虚偽を語ったのではなく、一部の事実だけを強調し、その全体的結果を隠すことによって、人間を誤った判断へと誘導したのです。

3 誇張と恐怖の結合

この偽りが効果を持つためには、恐怖と結びつく必要があります。恐怖は人間の判断力を弱めるため、誇張された情報を受け入れやすくなるのです。

たとえば、小さな問題が大きな危機であるかのように語られるとき、人はそれを冷静に検証する前に反応してしまいます。

このようにして、誇張と恐怖が組み合わさることで、思考は短絡的になり、深く考える余地が失われていきます。

この段階で人は、考えた結果として判断するのではなく、感じた不安に従って反応する状態へと移行します。

聖書は、「悪しき者は追う人もないのに逃げる」（箴言 28 章 1 節）と語っています。これは、恐怖によって現実以上の危険を感じ、冷静な判断を失った状態を象徴的に示していると言えます。

4 忙しさと情報過多

思考を奪うもう一つの重要な要素が、忙しさと情報の過多です。十分な時間と余裕があるときは、物事を深く考えることができます。

しかし常に忙しく、次々と情報が流れ込んでくる環境の中では、そのような余裕が失われます。

結果として、与えられた情報をそのまま受け入れるようになり、それを吟味することを行わなくなるのです。

この状態は一見すると活動的でありながら、実際には思考が働いていない状態です。

このようにして、思考は直接的に奪われるのではなく、考える余裕を失わせることによって弱められていきます。

イエスはマルタに対して、「あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである」（ルカによる福音書 10 章 41～42 節）と語られました。

忙しさによって本質を見る余裕を失うことの危険性が、ここにも示されています。

5 疑問を持たせない環境

さらに重要なのは、疑問を持たせない環境です。人は疑問を持つことによって初めて考え始めます。

しかし、その疑問が最初から生じない環境に置かれるとき、思考は始まること

さえありません。

この環境は、必ずしも強制的なものとして現れるわけではありません。むしろ、「これが普通」「こうするのが当然」といった形で提示されることが多く、その中で疑問を持つ必要を感じなくなります。

このような状態では、自らの判断を放棄しているにもかかわらず、それを自覚することができません。

聖書は、「すべてのものを識別して、良いものを守り、あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」（テサロニケ人への第一の手紙5章21節）と語っています。

真理は、与えられたものを無批判に受け入れることによってではなく、自ら吟味する中で見いだされるのです。

6 考える時間を奪う仕組み

以上の要素を総合すると、思考を奪うための仕組みが見えてきます。

それは、偽りによって認識を歪め、恐怖によって判断力を弱め、忙しさと情報によって余裕を奪い、疑問を持たせない環境によって思考そのものを起こさせないというものです。

この仕組みの特徴は、強制がほとんど見えない点にあります。自分で選んでいるように感じながら、実際には考える機会そのものを失っているのです。

ここにおいて支配は完成に近づきます。なぜなら、自ら考えない限り、その人は与えられた枠組みの中でしか生きることができなくなるからです。

7 聞いても悟れない状態

この状態はイエスが語られたたとえの中にも示されています。

マタイ福音書13章13節に「見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らない」とあるように、外面的には情報を受け取っていても、内面的には理解が伴っていない状態です。

これは単なる理解力の問題ではありません。むしろ、思考が働いていない状態を指しています。聞いても考えず、考えないために悟ることができないのです。

この状態が続くと、真理に触れてもそれを受け取ることができず、結果として、同じ状態にとどまり続けることとなります。

8 まとめ

以上のことから明らかなように、悪の戦略は強制ではありません。それは人間に「考えなくてもよい状態」をつくり出すことによって、支配を成立させます。

恐怖、偽り、忙しさ、環境といった要素が組み合わさることで、人は自ら思考することをやめ、その結果として外からの影響に従うようになります。

今回は、この仕組みが特に強く働く領域として、「教育」という観点から、人間の思考がどのように形成され、また制限されていくのかを考察していきます。

第4回 悪の戦略②教育による支配構造

1 なぜ教育が重要なのか

前回、悪の支配は強制ではなく、「考えなくてもよい状態」をつくることによって成立することを見てきました。そのために、偽りや恐怖、忙しさ、環境といったさまざまな手段が用いられます。

これらの手段が特に大きな影響を与えるのが、人間の思考を形成する教育の領域です。

なぜなら、教育は単に知識を与えるものではなく、人間の思考の枠組みそのものを形づくる働きを持っているからです。

どのように考えるか、何を当然とするか、何に疑問を持つかといった基本的な姿勢は、多くの場合、幼い時期に形成されます。

したがって教育は、人間を自由へと導く力にもなり得ますが、同時に思考を制限し、自ら考えない状態を固定化する手段にもなり得ます。

本回では、悪が教育という領域を通して、どのように人間の思考を形成し、自ら考えない状態へと誘導していくのかを考察していきます。

2 幼少期の決定的影響

人間は幼い時期ほど、外からの影響をそのまま受け入れやすい状態にあります。

この時期には、物事を批判的に検証する能力がまだ十分に発達していないため、与えられたものがそのまま「正しいもの」として内面に取り込まれます。

このときに形成される価値観や思考の枠組みは、その後の人生に長く影響を及ぼします。

聖書も、「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」（箴言 22 章 6 節）と語っています。

幼少期に形成された価値観や思考の方向性が、その後の人生に深く影響することが示されているのです。

人は成長してからも、無意識のうちにその枠組みに基づいて物事を判断するようになります。

したがって、幼少期に何が与えられるか、あるいは何が与えられないかは、人間の思考の方向を決定づける重要な要因となります。

3 信頼と権威の影響力

人間は、信頼している相手から与えられる情報を疑いにくい傾向があります。

特に幼少期においては、親や教師などの影響は非常に大きく、その教えは「自分で考えた結果」ではなく、「当然のもの」として内面化されやすくなります。

このため、教育は単なる知識の伝達にとどまらず、人間の思考の土台そのものを形成する力を持っています。

聖書も、「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない」（申命記6章6～7節）と語り、教育の重要性を強調しています。

しかし同時に、この強い影響力が誤った方向に用いられるなら、人は疑問を持つことなく、その枠組みを受け入れてしまう危険も生じます。

4 教えることと教えないこと

ここで特に重要なのは、「何を教えるか」という点だけでなく、「何を教えないか」という点です。

人は教えられたことによって形づくられると同時に、教えられなかったことによっても、その思考の範囲を制限されます。

たとえば、ある考え方や視点にまったく触れることがなければ、人はそれを「別の可能性」として認識することさえできません。

すると、人は与えられた枠組みの中だけで物事を考えるようになり、その外側を疑うこと自体が難しくなります。

その結果、人は自分で考えているつもりでありながら、実際には与えられた枠組みの中だけで判断するようになります。

このように教育は、直接的に何かを教えることだけでなく、何を考えさせないかによっても、人間の思考を方向づける力を持っているのです。

この構造は外からは見えにくいいため、本人がその制限に気づくことは容易ではありません。

5 批判的思考の欠如

教育におけるもう一つの重要な問題は、批判的思考の欠如です。批判的思考とは、与えられた情報をそのまま受け入れるのではなく、それを吟味し、検証する能力を指します。

この能力が育てられないとき、人は外からの情報や権威に対して無防備な状態

となります。その結果、どのような内容であっても、それが提示される形によっては容易に受け入れてしまいます。

聖書は「にせ預言者を警戒せよ」（マタイ福音書 7 章 15 節）と警告していますが、これは、何が真理で何が偽りかを見分けることが求められているということです。

しかし批判的思考が育っていない場合、その見分ける力は十分に働きません。このとき人は、誤った教えに導かれても、それに気づくことができない状態になります。

悪の支配にとって最も都合が良いのは、人が疑問を持たず、自ら吟味しない状態だからです。

使徒行伝 17 章 11 節には、ベレヤの人々が「果してそのとおりかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていた」と記されています。

聖書は、与えられた教えを無批判に受け入れるのではなく、自ら吟味する姿勢を肯定しているのです。

その意味で、見分ける力は他者から与えられるものではなく、み言に照らしながら、自ら繰り返し問い続ける姿勢の中で育成されていくものです。

6 支配の手段となる教育

以上のことを総合すると、教育がどのようにして支配の手段となるのかが明らかになります。

教育はただ知識を伝えるだけではなく、思考の枠組みを形成し、その範囲を決定する力を持っています。

もしその教育が、疑問を持たせない形で行われるならば、人は自ら考えることをやめ、与えられた考え方や価値観を当然のものとして受け入れ、その枠組みの中だけで判断するようになります。

この状態になると、外的な強制を必要とすることなく悪の支配が成立します。内面に形成された思考の枠組みそのものが、その人の判断と行動を無意識のうちに誘導するからです。

使徒パウロは、「あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない」（コロサイ人への手紙 2 章 8 節）と警告しています。

人間の内面に形成された思考の枠組みは、ときにその人自身を見えない形で束縛する力となり得るのです。

ここにおいて、教育は悪の支配を最も安定した形で維持する手段となります。

7 まとめ

以上のことから明らかなように、教育は極めて強力な影響力を持つ領域です。それは人間を真理へと導く手段ともなり得ますが、同時に思考を制限し、支配を固定化する手段ともなり得ます。

したがって問題は、教育そのものではなく、それがどのように用いられるかにあります。

第5回 思考を取り戻す主体的信仰

1 人生全体を方向づける思考の枠組み

これまでに見てきたように、恐怖によって思考が奪われ、その状態が習慣として固定され、さらに教育や環境を通して強化されるとき、人間は自分の頭で考えない状態へと誘導されていきます。

そして、この影響は一部の問題にとどまるものではありません。幼少期から形成された思考の枠組みは、その後の人生全体に影響を及ぼし、人間の価値観や判断基準そのものを決めていきます。

その結果、人は健康、人間関係、仕事、将来設計といったさまざまな領域で、自分で選んでいるように感じながら、実際には与えられた枠組みの中で判断するようになるのです。

特に、未来への不安が強くなる時、人は真理に基づいて考えるよりも、不安を回避することを優先して選択するようになります。

イエスが、「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな」（マタイによる福音書 6 章 31 節）と語られたのは、人間が不安によって思考を支配されやすい存在であることを示しているのです。

このように、恐怖と不安によって形成された思考の枠組みは、人間の人生全体を方向づけていきます。

では、このような支配から、人はどのようにして抜け出すことができるのでしょうか。

2 支配からの脱却はどこから始まるのか

重要なのは、外的な環境を変えることだけでは不十分という点です。なぜなら、問題の本質は外側ではなく、人間の内面に形成された思考の枠組みにあるからです。

したがって、支配からの脱却は、「思考そのものの回復」から始まります。そして聖書は、この思考の回復が霊的な回復と深く結びついていることを示しています。

使徒パウロは、「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（ローマ人への手紙 12 章 2 節）と語っています。

ここで示されているのは、思考の回復が単なる外面的な行動の修正ではなく、

支配されていた判断基準そのものが変えられることによって始まるということです。

3 思考の回復

人間の思考は単なる知的活動ではありません。それは、その人が何を真理として受け入れ、何を基準として生きているかということと密接に関係しています。

したがって、思考の歪みは単なる知識不足の問題ではなく、人間が何を信じ、何を基準として判断しているかという根本的な問題と結びついています。

逆に言えば、思考が回復される時、それは単なる理解の変化ではなく、人間の内面の基準そのものが変えられることを意味します。

この点において、「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ福音書 8 章 32 節）というみ言は決定的です。

ここで言われている自由とは、外的な束縛からの解放ではなく、内面的な支配からの解放です。ですから、真理を知ることがその出発点です。

4 真理が根本的な判断基準

以上のことから言えることは、思考を取り戻すために不可欠なのが、真理すなわち神のみ言による判断基準です。

人は何かを基準として物事を判断しますが、その基準が歪んでいるとき、どれほど考えても正しい結論には至りません。

思考停止の状態では、この基準が外から与えられたものに依存しているのです。その結果、その枠組みの中でしか考えることができません。

しかし神のみ言を思考の中心に置くと、その基準が変えられます。自分の経験や周囲の価値観ではなく、神のみ言に基づいて現実を理解するようになるのです。

このとき初めて、思考は本来の働きを取り戻し始めます。なぜなら、正しい基準のもとで考えることが可能になるからです。

5 吟味する姿勢

思考を回復するためにもう一つ重要なのが、物事を吟味する姿勢です。

聖書は、「すべてのものを識別して、良いものを守り、あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」（テサロニケ人への第一の手紙 5 章 21～22 節）と語っています。

この言葉はもともと預言や教えに関する文脈で語られたものですが、ここで言

う「識別」とは、与えられたものを無条件に受け入れるのではなく、それが真理にかなっているかどうかを吟味し、見分けることです。

この姿勢が失われるとき、人は再び思考停止の状態に戻ってしまいます。逆に、この姿勢が保たれるとき、どのような環境にあっても、外からの影響に流されることなく判断することができます。

ここにおいて、思考は受動的なものから主体的なものへと変わります。

6 主体的信仰とは何か

以上のことを踏まえると、信仰の本質が明らかになります。信仰とは、真理に基づいて自ら考え、判断し、選択する生き方です。

この意味において、信仰は思考を放棄するものではなく、むしろそれを回復するものです。

しかしここで注意しなければならないのは、主体的であることと、自己中心的であることとは同じではないという点です。

主体的信仰とは、自分の考えを絶対視することではなく、真理に従って考えることです。

このとき人は、外からの圧力によってではなく、内面的な確信によって行動するようになります。

聖書も、「ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである」（ローマ人への手紙 14 章 5 節）と語っています。

ここで示されているのは、信仰が単なる周囲への同調ではなく、自ら真理に照らして判断し、確信を持って生きることを求めているという点です。

7 真理による自由への転換

思考が回復される時、人間の状態は大きく変化します。それまで外から与えられた枠組みの中で生きていた人が、自ら判断し、選択する存在へと変わります。

この変化は、単なる意識の変化ではありません。それは生き方そのものの転換です。

ここにおいて、人は初めて恐怖や惰性から自由になります。なぜなら、それらは思考停止を前提として働いていたからです。思考が回復される時、その前提が崩れ、支配の力は弱まります。

このように、思考の回復は信仰と切り離すことができません。真理を知り、そ

れを基準として考え、吟味しながら生きるとき、人は本来の意味での思考を取り戻します。

そしてこの思考こそが、人間を悪の支配から解放する力となります。

次回は、これまでの内容を統合し、「真の自由とは何か」という観点から、恐怖・習慣・思考の回復がどのように結びつくのかをまとめていきます。

第6回 真の自由

1 これまでのまとめ

本シリーズにおいては、まず前シリーズの「聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅲ」で確認した、恐怖が人間をどのように支配するかという問題を出発点として考察しました。

つまり、恐怖は思考を揺さぶり、不安を通して人間の判断を歪め、行動を制限する力として働くということです。

そして、その恐怖が一時的なものにとどまらず、思考停止を引き起こし、それが習慣として固定されることによって、支配が内面化されていく過程を見てきました。

この二つを統合すると、悪の支配は一段階ではなく、複数の段階を経て完成することが明らかになります。

すなわち、恐怖によって人間の思考が揺さぶられ、その後に思考そのものが停止し、その状態が習慣として定着するという構造です。

2 恐怖と習慣の統合構造

この構造をより明確にすると、次のように整理することができます。

まず、恐怖が人間に働きかけ、判断力を低下させます。この段階ではまだ意識的な反応が存在しています。

その状態が繰り返されると、思考が行われなことが常態化し、やがてそれが習慣となります。

この習慣は無意識のレベルで働くため、人はそれに従っていることに気づかなくなります。こうして、外からの働きかけであった恐怖は、内面の構造として固定されるのです。

ここにおいて、悪による支配は最も安定した形を取ります。なぜなら、人が自ら進んでその枠組みの中で行動するようになるからです。

3 外的支配と内的支配

この観点から見ると、支配には二つの側面があることが分かります。それは外的支配と内的支配です。

外的支配とは、恐怖や圧力といった形で外から与えられる影響です。これは比較的認識しやすく、人はそれに対して抵抗を感じることもあります。

それに対して内的支配とは、思考停止や習慣として内面に定着した状態です。この場合、人はそれを自分の意思と感ずるため、支配されているという自覚を持ちにくくなります。

使徒パウロも、「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。そこで、善をしようと欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る」（ローマ人への手紙 7 章 19～21 節）と語っています。

これは、人間が自分の意思で行動しているように感じながら、実際には内面に形成された悪の力に支配されている状態を示しています。

実際には、この内的支配の方がはるかに強力です。なぜなら、それは外からの強制を必要とせず、人間の内側から行動を方向づけるからです。

4 真の自由とは？

ここで改めて、自由とは何かを考える必要があります。一般に自由とは、外的な制約がない状態として理解されることが多いのですが、これだけでは十分ではありません。

なぜなら、人は外からの制約がなくても、内面的に支配されている場合があるからです。恐怖や習慣によって判断が歪められているとき、その選択は自由とは言えません。

したがって、真の自由とは、外的な制約がない状態に加えて、内面的な支配からも解放されている状態でなければなりません。

5 真理による自由

前に紹介したように、自由についてイエスは、「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ福音書 8 章 32 節）と語られました。

なぜなら、人間は現実そのものによってではなく、その現実をどのように理解し、受け取っているかによって判断し、行動するからです。

恐怖や偽りによって認識が歪められるとき、人は実際には支配されていても、自分では自由に選んでいるように感じてしまいます。

しかし真理によって認識が正されるとき、人は初めて物事を正しく判断し、主体的に選択できるようになります。

恐怖や習慣による支配は、いずれも誤った認識や歪められた思考に基づいています。そのため、真理によって思考が正されるとき、その支配の根拠が崩れていくのです。

ここにおいて、初めて正しく判断し、選択することが可能になります。この状態こそが聖書が示す自由の本質です。

6 現代社会への適用

この問題は、特定の時代や状況に限られたものではありません。むしろ現代社会では、情報の増大と環境の複雑化によって、思考停止に陥る危険はさらに高まっています。

忙しさや不安、情報の洪水の中で、人は深く考えることを避け、与えられた枠組みに従って生きようになります。

聖書も、「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」（エレミヤ書 17 章 9 節）と語っています。

このみ言は、人間が自分の感覚やその場の雰囲気流されるままでは、正しく判断することができない危険を示しています。

このような状態では、支配がより見えにくい形で広がっていきます。したがって、現代に生きる私たちにとって、この問題は極めて現実的な課題です。

7 自由な生き方

では、このような状況の中で自由に生きるとはどういうことでしょうか。それは、恐怖に反応して行動するのではなく、習慣に流されるのではなく、真理に基づいて自ら判断することです。

聖書には「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない」（箴言 3 章 5 節）とあります。

真の自由とは、自分の感情や欲望に従うことではなく、真理を基準として判断することによって与えられるものなのです。

このとき人は、外からの圧力にも内面の惰性にも支配されることなく、自分の選択に責任を持って生きることができます。

このような生き方は簡単ではありませんが、思考を取り戻し、信仰に立つとき、それは実際にできるようになるのです。

8 結論

以上のことから明らかなように、真の自由とは単に制約がない状態ではありません。それは恐怖にも惰性にも支配されず、真理に基づいて選択することができる状態です。

恐怖は人間を外から縛り、習慣は内側から縛ります。しかし思考が回復され、

真理に基づく判断が可能になるとき、その両方の支配は力を失います。

真の自由とは、自分の力による独立ではなく、真理であるキリストとの結びつきの中に生きることにはかなりません。

「聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅲ」で見たように、恐怖から自由になることは終点ではありません。

内的な支配から解放されたとき、人は初めて神と隣人のために自分を用いることができる存在として立つことができます。

真の自由とは、束縛からの解放であると同時に、自らの天命へと向かう力の回復なのです。

恐怖に動かされるのでもなく、惰性に流されるのでもなく、真理に基づいて自ら考え選択する——それが本シリーズを通してお伝えしてきた主体的信仰の姿です。